悪役令息レイナルド・リモナの華麗なる退場 4


＋グウェンドルフ
近衛騎士団長を務める、フォンフリーゼ公爵家の長男。
莫大な魔力を持ち、眉目秀麗だが、基本無口で無表情。
トラブルが起きるたびに、レイナルドへの執着心が強まっていく。
＋メル
不死鳥の雛。
レイナルドが温めたことで
無事孵化した。
＋レイナルド
会社員だった前世を持つ、
エリス公爵家の次男。
乙女ゲームの「悪役令息」と
同じ道を辿らぬよう奮闘するものの、
トラブル体質のため裏目に出ることが多い。
ラムル神聖帝国に飛ばされ、
皇帝の妃候補にされてしまうが……？
＋ルシア
乙女ゲームの主人公。
皇帝の妃選びの場で
レイナルドと再会する。
＋リリアン
クレイドル王国の王女。
おっとりとしているが、
武芸に秀でている。
＋アシュラフ
ラムル神聖帝国の若き皇帝。
傍若無人な振る舞いを続けるが、
実は……？
＋オズワルド
デルトフィア帝国の第二王子。
特殊な能力を持つ魔法使い。
＋マスルール
アシュラフの側近。
怜悧な雰囲気で威圧感がある。
記憶力がいい。

CHARACTERS

第一章　二人の舞姫の物語

外に出ると、もう空は真っ暗だった。

夜になった鈴園（りんえん）の中は静寂に包まれている。

外の空気を吸おうと、俺は歩いて果樹園に向かった。――デルトフィア帝国の第二王子であるオズワルドに拉致されて、盗まれた不死鳥の卵を取り戻すためにラムル神聖帝国の宮殿に忍び込んで早三日。悪魔に呪われているという皇帝の嫁探しに巻き込まれ、転生仲間のルシアに再会したり、不死鳥が生まれたり、恋人である騎士団長のグウェンが俺を捜しに来てブチ切れたりと、色々なことがあった。

俺は今、宮殿の上空にあるイラムという円盤型の不思議な構造物の中にいる。初代皇帝が造ったという魔道宮殿だ。うっかり皇帝の嫁候補になってしまった俺とルシアは、イラムの中にある鈴園と呼ばれる後宮で、他の候補者の女の子達と共に留め置かれている。

今日は朝からアシュラフ皇帝の出した無茶苦茶な試験を二つクリアし、最近人が変わったと言われる皇帝の正体を確かめようと、夜になった今ルシアと一緒に動き出したところだ。

「結局、マスルールさんは来なかったな……」

数時間前、俺の泊まっている部屋に皇帝が侵入してきて、寝ていた俺は首を絞められて死にそうになったところをルシアに助けられた。六女典礼を取り仕切っているマスルールという皇帝の側近は、危険があったら呼べと言っておいて姿を現さない。

寝室にある鈴を鳴らせば鈴園に駆けつけると言っていたのに、いつまで待っても来ないので、ルシアがイラムの下層に捜しに行った。俺も一緒に行くと言ったけど、一人で大丈夫だと断られた。

「レイナルド様にはまだ休息が必要です。休んでいてください」

そう言われると確かにまだ気分が悪かったので、その言葉に甘えて短い睡眠を取った。

その後目を覚ました俺は、パンパンに詰まった思考を整理したくて鈴宮の外に出た。少し散歩しようと、夜の鈴園の中を一人で歩いているところだ。

「俺もこっそり地上に下りて、グウェンとウィル達に会いに行きたかったな」

マスルールに頼もうと思っていたけれど予定が変わってしまった。

俺を捜しにラムル神聖帝国まで来たグウェンは、何故か実家から一緒に来ているご用聞きのウィルと、俺が育てている聖獣のベルと地上の宮殿に滞在している。

行けたら行くと言っておいたから、グウェンは俺が来るのを待ってるだろうか。行けなかったのが皇帝に襲われて死にそうだったから、なんて知られたらまずいよな……

そういえば、皇帝に襲われたとき、寝室の窓ガラスが割れた。誰かがガラスを割って奴の注意を逸らしてくれたんだけど、その人は部屋の中には現れなかった。一瞬グウェンかと思ったが、それなら姿を消す理由がないし、あれは一体誰だったんだろう。

内心で首を傾げながら考えたが、鈴園の中にいるメンバーで該当するような人物は思い当たらない。助かったことには違いないから、お礼を言いたいけど……

考えても答えは出なかったので、頭の隅に置いておくことにした。敵じゃないなら、今の段階で心配する必要はない。

さっき浴室の鏡で気づいたけど、俺の首には絞められたとわかる指の跡がくっきりついている。昼間に皇帝を殴ろうとしてぶつけた手も、指の付け根が腫れてえらいことになっているから、グウェンに見られたらヤバい。何があったか洗いざらい吐かされるだろうし、結果、ブチギレた俺の彼氏とアシュラフ皇帝の全面戦争になる。

「うん、今日の夜は会えないけど、我慢しよう」

今日一日だけで、毒入りの茶を飲まされそうになるわ、池に落ちるわ、挙句に寝込みを襲われて首まで絞められた。本音を言えばなりふり構わずグウェンに抱きついて、もうなんとかして！　って泣きつきたい。グウェンの屋敷で布団にくるまって一生動きたくない。

でも、俺より若い女の子達が耐えているのに、年長者の俺がみんなを守らなくてどうする。あのクソ皇帝は、放っといたら本気で何人か殺しにかかるだろう。

「また無茶なこと言ったら、今度こそぶん殴って背負い投げしてやる」

「ぴ？」

俺の呟きに反応して、頭のターバンから澄んだ笛の音のような鳴き声がした。

声の主はメルだ。不死鳥の雛で、俺と一緒に闇オークションで皇帝に買われてここに来た。いや、

正確には俺が卵のついでにうっかり買われたんだけど。昨夜無事に卵から孵ったものの、ルシアとオズ以外のみんなにはまだ隠している。

「お腹すいてない？　ちゃんと隠れててね」

「ぴぴ！」

元気に鳴くメルの声に癒されながら、水路に架かる橋を渡り、地面に黒々とした影を落とす果樹の道に沿って歩く。ところどころにモザイクタイルのランプが灯っていて、足元はよく見えた。

ふと、どこからか声が聞こえたような気がして、俺は耳を澄ませた。

「……歌？」

こんな時間に誰だろう。その声に吸い寄せられるように果樹園を通り抜けて奥に進むと、正殿に繋がる白い石の橋が見えた。そこにある水路の側にはライラが一人で立っていた。ライラだとわかったのは、彼女が首から革紐のお守り袋を下げていたからだ。

夜の静かな空気にライラの高いソプラノがよく通る。サーカスのときにも聞いたけど、本当に綺麗な歌声だ。ラムルの少数民族の言語だろうか。言葉はわからないけれど、なんとなくもの悲しい響きがある。

胸が引き絞られるような切なさを覚えて、俺は水路の手前でしばらく聞き入った。

歌い終えて深く息をついたライラが振り向いた。そして俺を見つけて、びくっと飛び上がる。

「わ！　レイさん!?」

「ごめん。驚かせちゃって」

「全然気づきませんでした。見られてたなんて恥ずかしい」

「勝手に聞いちゃってごめん。歌、本当に上手だね」

両手で頬を覆うライラが年相応に可愛く見えて、俺は笑いながら歩み寄った。近くまで来ると、ライラが思い出したようにぺこっと頭を下げる。

「レイさん、さっきの試験では、ライルを助けてくれて本当にありがとうございました」

「ライルは大丈夫？」

「はい。もう心配いらないと思います」

それを聞いて胸を撫で下ろした。第二の試験で、俺はイラムの池で溺れかけたライルを助けたんだけど、かなりぐったりしていたから気になっていたんだ。

「深刻なことにならなくてよかった。ライラも怖かっただろう。よく頑張ったね」

俺がそう言うと、ライラは眉を下げた。いつも明るいライラにしては元気がないように見える。俺はそっと顔を覗き込んだ。

「どうかしたの？」

「……私、昨日皆さんの前で気楽にやりますなんて言ったのに、もう帰りたいって言ったら笑いますか？」

ぽつりと呟く力のない声を聞いて、俺は首を横に振る。

「笑わないよ。あんな最悪な奴を前にしたのに、二人とも逃げないんだなって感心してるくらいだ」

「逃げられるのなら、今すぐ逃げ帰りたいと思ってるんです。私、怖がりで意気地なしだから」

「帰りたくて当然だよ。池に飛び込めって言われたり、毒入りのお茶を飲まされそうになったりしてるんだ。俺なんてとっくに本気で逃げようと思ってるからね」

俺が自信を持って言うと、ライラは微(かす)かに笑って首から下げたお守り袋を握った。

「不安なんです……私じゃなくて、ライルに何かあったらって。あの子は私と違って意思が固くて勇敢だから、私が怖いと思うようなことでも躊躇(ためら)わずに行ってしまう。何かよくないことが起こりそうで……。私は、今日だってライルを危険な目に遭わせてしまった。レイさんがいなかったらと思うとぞっとします。私はどうしても身体がすくんでしまって……」

悔やむような声を漏らすライラの顔を見ていたら、何とか元気づけたいと思った。ライラは十分よくやってる。こんなふうに落ち込んで自分を責める必要はないから。

「ライラは頑張ってるよ。それに、何かを怖がるのは悪いことじゃない」

「そうでしょうか……私は怖がりだからできないことも多いし、いつも失敗ばっかりです」

しゅんとした彼女の小さな肩を見て、不意に俺は自分の子供の頃を思い出した。

「……昔、俺も結構怖がりだったんだ。庭の隅にある木立(こだち)の暗がりが怖くて、一人でそこに行くのが嫌だった。でも、怖いものがあるのはいいことだって、あるとき言ってくれた人がいたよ」

「いいこと？」

「そう。怖ければ、そこで立ち止まるだろうって。本能が恐れていることを避けるのは、自分を守るためには必要なことだって言われた。俺はその通りだと思う。だからライラは、ライルの分まで怖がっていいんだよ。君が怖がることで、ライルは注意深くなれる。ライルが誰かを傷つけたり怪

我したりしないように、ライラがいっぱい怖がればいい」

ライラはじっと俺の話に耳を傾けている。偉そうだったかなとちょっと照れくさくなって、俺は頬を掻きながら続けた。

「といっても、これは受け売りなんだけどね。昔お世話になった人の」

その人の顔を思い出して、俺は苦く笑う。変だよな。今になって、なんであの人のことをこんなにはっきり思い出すんだろう。

「ありがとう、レイさん。そう言ってもらえて、少し気持ちが楽になりました」

「本当？　なら語っちゃってよかったな」

俺は内心の動揺を悟られないようにおどけた。

気分を変えるために、魔法で花火でも出そうか。でもあいにく、自分が魔力封じの首輪をつけていることを思い出す。首輪の鍵を呑み込んだトビはオズが病院に連れていったけど、その後の音沙汰がない。そのせいで俺はまだ魔法が使えないままだ。

「この首輪がなかったら魔法で花火とか見せられるんだけど、残念だな」

「花火？　レイさんはそんなこともできるんですか？」

「うん。多分明日には外せると思うから、そしたらみんなに披露するよ」

「本当ですか？　楽しみです」

ライラが嬉しそうに笑う。

「なんだかレイさんって不思議な人ですね」

「そうかな？　ごく普通の人間だと自負してるけど」
「そんなことないです。女好きの座長と酒場で抱き合ってたし」
「待って!?　座長と俺は抱き合ってないから！」
ライラのセリフにずっこけそうになった。お騒がせ王子の忘却体質のせいで、ライラの記憶が変な風にねじ曲がってる。
「え？　そうでした？　私は応援しますよ。ライルもきっと喜びます」
「いや、ライルは絶対冷たい目で見てくるだけだから。……君達、性格はだいぶ違うよね」
無理やり感はあるが、この話題を終わらせたくて話を変える。ライラはちょっと不思議そうな顔をした後、頷いた。
「そうなんです。私達似てないんです。似せようとしてるだけで、実はよく見るとそんなに似てないんですよ。顔とか」
「え？　そう？」
「はい。中身だってライルの方が私より全然しっかりしてるし。だからライルは一人でなんでもやろうとするんですけど、私はいつも心配になっちゃうんです」
そう言ってライラは笑ったけれど、声は少し強張っていた。こんな場所に長くいて、不安にならないわけがない。
無理もないと自分の首に手を回した瞬間、俺は金色のネックレスのことを思い出した。デルトフィアで出会った、サエラという占い師のお婆さんにもらったお守りだ。身につけていれば持ち主

を守ってくれるらしいけど、残念ながら今のところ俺は受難続きだ。でも古い魔道具だと言っていたから、気休めでも持っていれば気分は変わるだろう。
「これ、もしよければ使って。もらいものだけど、お守りらしいから」
ネックレスを外して差し出すと、それを見たライラはさっと顔色を変えた。
「これは……！　サエラ様をご存知なんですか？」
その反応に今度は俺が驚く。
「え？　知ってるの？　占い師のお婆さん」
「はい。このネックレスは確かにサエラ様のものです。サエラ様は、私達の故郷にいた祈祷師（きとうし）の一族の方です。村が火事になってから行方（ゆくえ）知れずになっていましたが……ご無事だったんですね」
ライラの目に喜びが浮かぶのを見て、俺は自分の巡り合わせに驚いた。まさかあのお婆さんとライラ達が知り合いだったとは。
無事を知って喜んでいるということは、お婆さんが国を追われたことは知っているようだ。そういえば、お婆さん自身も自分はとある少数民族の末裔（まつえい）とか、そんなことを言っていたような……
「待てよ、村が火事って言った？　お婆さんは家を焼かれたって言ってたけど、もしかして結構大きな火事だったの？」
「……はい。村の大部分が焼けてしまって、みんな住む家を失って散り散りに……」
ライラはそこまで言って口をつぐんだ。それ以上説明する素振りはなかったので、俺は追及するのをやめた。

「こんな偶然もあるんだな。お婆さんは今、デルトフィアにいるよ。会いたかったら連絡取るけど」
「本当ですか？　ありがとうございます！　ライルが知ったら喜びます。あの子、サエラ様に憧れていたから……レイさんがサエラ様を保護してくださったんですか？」
ライラは胸の前で手を組み、感極まっている。もしかして、あのお婆さんは結構偉い人だったんだろうか。本当に凄い力を持っていたりして。
そのとき、後ろから声が響いた。
「ライラ、何やってるの」
振り向くと、ライラと同じ民族衣装を着たライルが立っていた。俺とライラを見つめる顔は険しい。月明かりとランプの灯りで照らされた顔色はあまりよくないように見えた。
ライルは走ってきて、ライラの手を引いて自分の方に引き寄せた。
「一人で外に出たらダメだよ」
「ごめん、ちょっと外の空気を吸いたくて。でも、レイさんと話してただけだから」
「姉さんは女の子なんだから、レイさんはいい人でも男の人と二人でなんて気をつけて。それに、もし鈴園で皇帝に会ったりしたら大変だよ」
顔を顰めてライラに注意するライルを見て、俺は確かに悪いことしたかも、とちょっと反省した。顔見知りのルシアやリリアンがいるから気が緩んでいたけど、端から見たら、俺は後宮に紛れ込んでる怪しいデルトフィアの男だからな。

「俺がライラに話しかけちゃったんだ。女の子に配慮が足りなかったね、ごめん」
俺も謝ると、ライルは真面目な顔で頷き、頭を下げた。
「レイさん、先ほどは助けてくださってありがとうございました」
「お互い大変だったね。もう大丈夫？」
「はい」
「ライル、まだ休んでいなくて平気なの？」
ライラが心配そうな声でそう言ったが、ライルは硬い表情のまま頷いた。
「ここにいられる時間は限られているんだから、やるべきことをやらなくちゃ。余計なことしてないよね？」
最後は声を落として尋ねたライルに、ライラが眉尻を下げる。
「してないよ……でも、私――」
「ライラは何もしなくていいから。全部私がやる」
俺の顔をちらちら見ながら何か言おうとしたライラに、ライルがぴしゃりと告げる。口を閉じたライラを見て、俺は昨日の夜オズに聞いたことを思い出した。
頭の中を整理して、そこで一つの可能性に思い至る。
「もしかして、二人が狙ってるのはスイード殿下？」
俺の問いかけに、ライルがぎょっとした顔になった。目を見開いた後、怖い顔でライラを睨む。
「ライラが言ったの？」

「わ、私は何も」
ぶんぶんと首を横に振るライラが泣きそうな顔になる。俺はさっと片手を上げた。
「ライラからは何も聞いてない。別の人が、二人は皇族の誰かを呪ってたって言ってたのを思い出したんだ。それに、さっきサエラお婆さんが二人と同郷だって話を聞いたから」
「サエラ様……？」
お婆さんの名前に驚いたライルに、俺はデルトフィアであったことを簡単に説明した。
「お婆さんは、偉い人に家を焼かれて国を追われたって言ってた。ラムルに来てから、スイード殿下の話も耳にしたよ。彼は皇族にかけられた呪いの恐怖に打ち勝てず、皇位を継承しなかったらしい。でも、それからも呪いを解く方法をずっと探してたそうだから、もしかしてそこが繋がるのかなと思って。スイード殿下は呪いを解く方法を占ってもらったけど、上手くいかずにライラ達の村を焼いたってこと？」
村を焼かれて住む場所を追われたなら、スイード殿下を恨むのは当然だ。村を焼いたのがアシュラフ皇帝ということも考えられるけど、人が変わる前、皇帝は人格者だったと聞いている。それに二人のこの反応を見たら、恨んでる相手はスイード殿下の方で間違いないみたいだな。
「君達は、スイード殿下に復讐しようとしてるの？」
全部私がやると言ったライルの言葉の感じだと、呪詛をかける以外にも何かしようとしているのかもしれない。それなら様子を見るんじゃなくて、今確かめて白黒つけた方がいい。
ライルは顔を強張らせて俺を見た。怯んだ目をしたのは一瞬で、硬い声で答える。

「邪魔しないでください」
顔を逸らさずに言い、ライルは唇を噛んだ。
「このまま、放っておいてくれませんか」
「本当に皇族に手を出すつもり？」
あえて落ち着いた声で聞くと、不安を顔に浮かべるライラの隣で、ライルは真顔で頷いた。
「四年前、私達は突然村を焼かれました。一日だって忘れたことはありません。ただ普通に暮らしていただけの村の人が何人も死にました。でも少数民族の小さな部落だからって、大きな問題にならなかった。あの男に復讐しないとみんなの無念を晴らせない」
「ライル……でも」
ライラが声を上げたが、ライルは無視して続ける。
「村を焼いたあの男が今も宮殿でのうのうと生きているのが許せない。刺し違える覚悟でここに来たんです。村を奪ったあの男に復讐できるなら、その後どうなっても構わない」
「ライル！」
「考え直した方がいい」
俺の口から思ったよりも強い声が出た。ライラが口をつぐみ、驚いた顔で俺を見る。
「どういう意味ですか」
ライルに向き合って、俺は真面目な顔で口を開いた。
「残される人のことはどうでもいいの？」

皇族を手にかけようとしたら当然捕まるだろうし、その後命はない。どうなっても構わないと言ったが、それは潔い言葉のようでいて、自分以外の人を蔑ろにする言葉でもある。

「復讐に生きて、それで君が命を落として、謀反人として裁かれることをライラはどう思うだろう。それを考えたことがある？」

もしこれが俺よりも年上の大人相手だったら、俺はここまで強く言わないかもしれない。でも、ライルはまだ子供だ。年だってウィルと同じくらいで、そんな子供が後先を考えず復讐に向かっていくのは見過ごせない。

「まだなら、今から君は考えるべきだ。ライルがもし死んだら周りの人達がどうなるのか。ライラがその後、どんな人生を歩むことになるのか。俺は部外者だけどこれだけは言っておくよ。今生きている命より尊いものなんてない」

昔、父親の謀反によってウィルが殺されそうになったことを思い出していた。

さっき、ライルは俺とライラの姿を見て真っ先にライラを心配した。今日の試験でもライラを庇って池に飛び込んだ。ライラを心から大切に思っていないとそんなことはできない。その気持ちがあるなら、復讐なんてせずに生きられる。

「復讐に命を捧げることと、生きている家族と一緒にいること。自分が選ぶべきなのはどちらなのか考えて。君が危ない目に遭ったら、一番辛い思いをするのはライラだよ」

ライルは俺の言葉を黙って聞いていた。唇を引き結んでいたけど、俺がライラの名前を出すたびに青い瞳が微かに揺らぐ。

「今までの恨みはすぐにはなくならないと思う。でも、引き返せるならそうするべきだ」

唇を噛んで俺を見つめ続けるライルの袖を、ライラが怖々と引いた。

「ライル……もうやめよう」

「っ、どうして？」

ライルが傷ついたような目でライラを見つめる。

「ライラも邪魔するの？　やっと教会に潜り込んで、ここまで準備してきたのに」

「ごめん、でも……怖い」

絞り出すような声で言い、ライラが俯いた。

「私は怖い。ずっと言えなかったけど、ライルが死んじゃったらって思うと、毎日怖くてたまらない。もうやめよう。今やめないと取り返しがつかなくなっちゃう」

「……でも」

「私達には神樹の種が残ってる。だからきっとまたやり直せるよ。私はライルが元気でいてくれるなら、どこでだって頑張るから。今よりもっともっと頑張る。復讐なんてやめて、いつかみんなで暮らせる村を作ろうよ。きっと座長もそう言ってくれる」

話すうちにライラは涙声になり、最後には本格的に泣き始めてしまった。ライルは、怖いと繰り返して泣くライラを静かな顔で見つめていた。

ライルは口を硬く閉じてしばらくの間じっと動かなかったが、やがて、ふっと顔つきが変わった。憑き物が落ちたというのか、暗く頑なだった雰囲気が薄れ、年相応に幼さを残した顔になる。

ライルはゆっくり手を伸ばし、泣いているライラの身体を抱きしめた。
「ライラは恨んでないの？」
囁くような声で問いかけるライルに、ライラは顔を上げて頷いた。
「恨んでたけど、でも、私はライルの方が大事だから」
きっぱりと言い切った答えに、ライルは青い目を滲ませた。唇が震えて、くしゃりと顔を歪める。
そして、そっくりな泣き顔でライラの肩に頭を擦り寄せた。
「……くだって、ライラのことが一番大事だよ」
「ライル」
ライラが安心したように眉を下げ、ライルにしがみついた。二人を見守っていた俺もほっとして息をつく。
ライルは首から下げていたペンダントを外した。第二の試験のとき、イラムの池に投げ込んだものだ。チェーンの先には金属でできた目玉のような形の飾りがついている。ライルは少しだけ迷う素振りを見せた後、それを水路の中に投げた。
ぽちゃんと水に落ちたペンダントは浮かび上がらない。すぐに暗い底に沈んで見えなくなるのを、ライルは黙って見つめていた。
「それは？」
「呪いの媒体です。襲撃に失敗したら、自分の命と引き換えにスイードを呪ってやろうと……。私には言葉を操る力がないので、大した効果はなかったと思いますが」

「捨てちゃって大丈夫？　跳ね返ってきたりしない？」
恐る恐る俺が尋ねると、ライラも不安そうな顔になる。すると、ライルはさっぱりした表情で頷いた。
「多分大丈夫です。呪術がかかる前だし、私には呪いは向いてないって、昔サエラ様に言われたことがあるので。跳ね返らないように呪詛はあのペンダントに込めていたから、媒体を手放したら終わります」
「なるほど」
俺は納得したが、ライラがまだ不安そうにしているので、手に持ったままだったお婆さんのペンダントを差し出した。
「じゃあこれ、ライルがつけたらいいよ。お守りになるから」
さっきライラにしたのと同じ話をすると、ライルは驚いて俺の手を見つめた。
「サエラ様の……でも、レイさんがいただいたものですよね」
「うん。そうだけど、俺はこれがなくても多分何とかなるから。お婆さんのものだったらライラも安心でしょ。もし呪いが返ってきたら防いでくれそうだし、しばらく持っていていいよ」
そう言って俺はライルの手に無理やり握らせる。三日月のペンダントをじっと見下ろしたライルは深々と頭を下げた。
「ありがとうございます。宮殿を出るまでお借りしてもいいですか」
「もちろん。お互い何ごともなく無事にここを出られるといいね」

俺の言葉にライルは神妙な顔で頷き、隣のライラをちらっと見た。
「レイさん達は早く帰った方がいいかもしれません。イラムに来てから、ライラがここによくないものがいるって言うので」
「よくないもの？」
俺は瞬きしてライラを見る。ライルと目を合わせたライラは、そっと周りを見回しながら口を開いた。
「昨日の夜から、ここの木がずっと緊張しているんです」
「木？」
不思議な言い方だな。俺が首を傾げると、ライラはゆっくりと頷いた。
「木が言ってるんです。早く帰りなさいって」
「えっ……？」
俺のきょとんとした顔に気づいたのか、取り繕うような表情でライラは続けた。
「そんな気がするだけなんですけど……私、植物の気配に少し敏感なんです」
ライルを見ると、驚くでも呆れるでもなくライラの言葉を受け入れている。
木が言ってる、なんて不思議な感性だな。本当なら普通に感動する。純粋で綺麗な心を持っていないと不可能な芸当だろう。ライラはお婆さんの知り合いみたいだし、同じ村の出身だから超自然的な何かを感じるような感覚があるのかもしれない。
「木とコミュニケーションが取れるなんて、妖精みたいだね」

俺は感心しながらそう言った。首からさげたお守り袋をぎゅっと握るライラを見つめる。
「早く帰りなさい、か……。あの皇帝がいるからか？　確かに極悪非道だからよくないものであるのは間違いないね。また何かわかったら、俺にも教えてくれる？」
ライラが頷いたのを確認した俺は、そろそろこの場から離れることにした。
「二人と話せてよかったよ。デルトフィアに帰ったらお婆さんに連絡を取ってみるね」
「ありがとうございます。サエラ様にお会いできるなら嬉しいです」
ライルが明るい表情になって俺は一安心した。二人はもう大丈夫だろう。

双子と別れ、自分の鈴宮に帰るために果樹園の出口へ向かう。
ポケットから懐中時計を取り出して時間を確かめた。俺の家の懐中時計は残念ながら池の水に浸かったせいで止まってしまったので、グウェンからもらった方を使う。
黒い時計には銀色の狼のチャームがついていて、それを見たら無性に会いたくなった。
「今夜は会えないかなぁ」
時計を見ながら呟いたとき、ずっと大人しくしていたメルが頭上で「ぴっ」と鳴いた。
どうした？　と思った瞬間、後ろから飛んできた何かに時計を掠め取られた。
「うわ!?」
叫んで道の脇に着地した影を見ると、またあの子猿だった。昨日イラムの一層で、俺の時計を盗んで逃げた奴。

「こら、お前また！」
子猿は懐中時計をカチャカチャと振っている。それを見て血の気が引いた。
「ちょっと、それは本当に困る！　返して！」
蓋を開けられたらヤバい。慌てて猿に手を伸ばすが、子猿は俺の手を掻い潜ってぴょーんと飛び上がった。離れた地面に着地して、俺を見て首を傾げる。
「キ？」
「キ？　じゃなくて、お願いだから返して！」
グウェンの時計は盗られたらまずい。あれにはフォンフリーゼ公爵邸に転移する魔法陣が描かれている。金銭的価値というよりセキュリティの問題が……
じっと俺の顔を見ていた子猿だったが、やがて尻尾をゆらゆらと振った。
またね、と言うみたいに。
「ちょっと！」
「キキー！」
子猿はぴょーんと飛び上がって木の枝に乗り、夜の闇に溶けるように消えた。
「嘘だろー!?　泥棒!!」
あれがなくなるなんてヤバすぎる。グウェンになんて説明したらいいんだ。
俺は子猿が消えた方へ駆け出したが、木を伝って移動する音はすぐに聞こえなくなり、あっという間に姿を見失ってしまった。

「どこに行ったんだ……ヤバいヤバい」
昨日と同じように、あの変な宝物庫に持っていかれたら厄介だ。魔法の鏡がある廊下への道はもう覚えていない。
「うう、グウェンに怒られるネタが着実に増えてる……」
そもそも、下層にいるはずの子猿がどうやって鈴園まで上がってきたんだ？　鈴園には皇帝と六女典礼の候補者か、管理人であるマスルールがいなければ部外者は入ってこられないはずだ。マスルールがわざわざ子猿を鈴園に持ち込むはずがないし、アシュラフ皇帝はもっとない。なら一体誰が？
と思ったとき、果樹園の奥から小さな声が聞こえた。草を踏む軽い足音がする。
「……キール？　シャキール、どこ？」
俺が思わず立ち止まると、その声の主が木々の間からひょこっと姿を現した。小さな男の子だ。
「ひゃっ、ごめんなさい！」
「あっ、ちょっと待って！　逃げないで！　君、あの猿の飼い主？」
俺は、慌てて隠れようとした男の子を呼び止めた。俺の声にびくつきながらも、その子は動きを止める。
月明かりで浮かび上がった顔立ちは綺麗で、白っぽい髪に大きな青い目をしている。歳は多分ウィルより少し下だろう。寝巻きなのか薄そうな生地だったが、質のよい光沢のある絹の服を着ている。

イラムの中にいて、六女の候補者以外に入れる人物を思い出した。皇帝の実の兄弟だ。つまり、この少年の正体は――

「アルフ殿下ですか……？」

俺が尋ねると少年は目を大きく見開いて、おずおずと前に出てきた。アシュラフ皇帝には、アルフという名前の弟がいるらしい。昨日広間に集められた女の子達がそう言っていた。

「僕の名前を知ってるの？」

「アシュラフ陛下の弟君ですよね。どうして鈴園に？」

怯えさせないように優しく話しかけると、彼は手を後ろに回してもじもじしながら俯いた。

「ごめんなさい。鈴園ってどんなところか気になって、こっそり上がってきちゃった」

「さっきの子猿は殿下のペットですか？」

「うん、シャキールは伯父様にもらったの。でも悪戯好きで、いつも脱走するんだ」

「ここにはお一人で？」

こくん、と頷くアルフ殿下。皇帝の親兄弟なら鐘の魔法陣を起動できる。あの悪魔みたいな皇帝の弟であることが信じられないくらい、純朴そうな王弟殿下だな。

「お兄さんはなんて名前なの？」

「俺はレイといいます」

「レイさんも兄上の鈴園に入ってるの？」

首を傾げるアルフ殿下に、俺は頷いた。

「まあ、そうです」

「じゃあ、お兄さんが兄上のお嫁さんになるってこと？」

「なりません」

速攻で否定した。俺を見てお嫁さんになるの？　って、もうその言葉がおかしいだろう。俺は男だよ。どう見ても男だ。そこに違和感はないのか。

目をパチパチさせて俺を見上げるアルフ殿下に心の中でツッコミを入れた。殿下は少し残念そうな顔をしてから、また手を後ろに回してもじもじしている。

「鈴園にいる人はみんなお嫁さんになるんじゃないんだ……。これで僕にも姉上ができるのかと思ったのに」

「殿下はお姉さんが欲しいんですか？」

俺の質問に、アルフ殿下は恥ずかしそうに笑った。

「はい。兄上はすごい方だから、お仕事もいっぱいあって忙しそうだし、姉上ができれば僕と遊んでくれるかなって」

はにかみながら呟くアルフ殿下を、俺はなんとも言えない気持ちで眺めた。

皇帝を慕っているようだけど、最近人が変わったと噂されているのを知らないんだろうか。

「殿下はアシュラフ陛下と最近お話をされましたか？」

突然の俺の問いに、アルフ殿下はきょとんとして首を横に振る。

「何故かわからないけど、少し前からみんな兄上とはしばらく話さないようにって言うの。確かに

兄上は最近ずっとどこかに出掛けていて、僕とは遊んでくれなくなった。落ち込んでいたら伯父様が寂しくないようにって、シャキールをくれたんだ」

やはり、最近のアシュラフ皇帝とは交流がないらしい。周囲の配慮だろうな。

「僕は最近までお祖父様の家にいたんだけど、戻ってきたらお祖父様もずっと難しい顔で色んな人と話しこんでいて……兄上に何かあったの？」

「それは俺も知りたいと思ってるんですけど……あの、陛下と話すなと言われたのはいつ頃のことでしたか？」

「ええっと、多分三、四ヶ月前。兄上はどうしたの？　あんなに優しかったのに」

不安そうに見上げてくるアルフ殿下に、俺はなんと答えたらいいものか悩んだ。

この子は皇族にかけられた呪いのことを知っているんだろうか。そもそも俺は以前の皇帝の人となりを知らないから、説明しようにも何も語れないんだよな。言えるとしたら今日ロシアンルーレットをやらされたことと、池に落とされたことくらいだけど、そんなのこの子には話せないだろ。

「俺も来たばかりなので、陛下のことはよく知らないんです。お力になれなくてすみません。あの、さっき子猿に俺の懐中時計を盗られてしまって、返してほしいので呼び戻してもらえませんか？」

「え!?　シャキールが？　ごめんなさい」

皇帝の話題から切り替えるように子猿の盗みを告げ口すると、アルフ殿下は慌てて首にかけた小さな笛を鳴らした。しかし、いくら待っても子猿は戻ってこない。

「シャキールは綺麗なものとか、貴金属や宝石が大好きなの。なかなか僕の言うことは聞いてくれなくて……でも、そのうち帰ってくるから大丈夫」

そのうちっていつ？　明日には逃げるんだけど？　と言うわけにはいかなかったので、俺はがっくり肩を落として子猿が消えた闇を見つめた。

＊　＊　＊

昔の夢を見た。

ライラに、人からの受け売りなんだ、なんて話をしたせいかもしれない。

子供の頃、庭の奥にある木立の暗がりが怖かった。今でこそベルと一緒に寝転んで夜を明かすこともあるが、人気（ひとけ）のないその場所は近寄り難くて、当時は一人で行けなかった。

夢に出てきたあの人は、俺の記憶にある昔の姿のままだった。

父さんを訪ねてきて、庭に一人でいる俺を見つけたバレンダール公爵は、隠れんぼをしようと誘ってくれた。広い庭で、二人で代わりばんこに鬼をやった。

木の上とか、落ち葉の山の中とか、色んなところに隠れてはすぐに見つかったけれど、彼は驚くほど隠れるのが上手かった。

俺は公爵を見つけられず木陰をうろうろしていたが、やがて怖くなって音（ね）を上げた。

「おじさん、どこ？」

泣きそうな声で呼んだら、すぐに後ろで草を踏む音がして、振り返ると公爵が立っていた。

「ここだよ。この辺りは暗くて怖かったかな」
「……そういうわけじゃないけど」
暗いところが怖いなんて言うのが恥ずかしくて、俺が別の理由を探していると、彼は優しい顔で俺を見つめた。
「レイ君、怖いという感覚は人それぞれだから悪いことじゃない。むしろ、私は怖いものがあるのはいいことだと思っているよ」
「いいこと？」
俺が首を傾げると、歩み寄ってきた公爵に頭を撫でられた。
「怖ければ、そこで立ち止まるだろう。本能的に嫌だと感じることから逃げるのは、自分を守るためには必要なことだよ。暗いところを怖いと感じるのも、見えない敵から身を守ろうとしているのかもね。怖いと思うから、危険を回避できるんだ。だから君のそれは正しい反応なんだよ」
穏やかな顔で説明する公爵に、俺は素直に頷いた。彼がいつも子供相手にもちゃんとわかるように説明してくれるから嬉しかった。
「おじさんは怖いものある？」
二人で屋敷の方へ戻りながら、俺はそう聞いた。
俺を見て瞬きした公爵は、少し時間をかけて考えてから口を開いた。
「怖いものか……そうだなぁ。強いて言うなら、幸せな記憶を忘れてしまうこと、かな」
「忘れること？」

「もう年だからね。おじさんは忘れっぽいんだ。家族のことはちゃんと覚えているけれど、子供の頃の友達の名前なんかはもう忘れてしまった」
「大人はそうなの？」
「そうだよ、エリス公爵だって同じだ。……そう言うと怒られそうだな。あとはそうだな、この屋敷に出入り禁止になって庭の花壇を見られなくなるのも怖いなぁ」
腕を組んで笑いながら言ったバレンダール公爵を、俺は不思議な気持ちで見上げた。俺とは怖いと思うものの種類が全然違ったから、ちょっと戸惑ったんだ。
そんな俺を見下ろして、公爵は軽くウインクした。
「だから私がレイ君を忘れないように、これからもおじさんと遊んでもらえると嬉しいな」
「うん、いいよ。おじさん隠れんぼ上手だから楽しいし」
また遊んでくれると遠回しに言われたことが嬉しくて、俺は笑顔で頷いた。
「そう、私は隠れんぼが得意なんだ。昔兄とやったときはね、兄は絶対に私を見つけられなかったんだよ。コツがあるんだ。それはね――」
得意そうな顔で笑ったあの人は、それから何て言ったんだったか。夢はそこで終わってしまった。瞼にふわふわしたものが当たって目を開けると、横向きで寝ている俺の目の前に金色の羽毛の塊があった。またメルが俺の顔に乗っていたんだろう。ずり落ちて片方の翼が俺の鼻に引っかかり、そのままスピスピ寝ている。
可愛いな、と微笑みながら、俺は今見ていた夢を思い返す。どうしてこんなに鮮明に、まだあの

人のことを思い出してしまうのか。

もう一度バレンダール公爵に会えたら、聞きたいことがたくさんある。

幼い俺に怖いものがあってもいいと言ってくれた彼自身は、あのときどんな気持ちでいたのか、俺は一度も考えたことがなかった。優しくて、穏やかな見た目と同じく、その内面も善良なもので満たされていると思っていた。それは間違いで、俺は彼の本当の姿を知らないだけだったんだろうか。

ゲーム通り、俺が悪役のレイナルドだったらどうなっていただろう。前世を思い出してから、俺は自分のコンプレックスにいちいち落ち込んでいるのがバカらしくなって、庭で泣かなくなった。魔法の勉強をしたりルウェインと遊んだりするのが楽しくて、公爵とはだんだん疎遠になったのだ。もしあのまま公爵との交流が続いていたら、彼は俺に心の内を話してくれただろうか。

後悔なのか、これは。

俺を陥(おとしい)れようとした相手に対する感情にしてはあまりに複雑で、考えても答えがわからない。だから、もう一度会って話したい。話をして、このやるせない感情を手放したい。

「ぷぃ……」

鼻に何か詰まったのか、嘴(くちばし)を動かしながら寝ているメルの背中を指で撫でながら、俺は気がついたらまた眠っていた。

＊　＊　＊

試験二日目の朝は、鐘の音で起こされた。

昨日の夜、俺はアルフ殿下と一緒に子猿を捜したが結局見つからなかったので、殿下を一層まで送り届けてから鈴園に戻った。

俺の寝室は、皇帝に襲われたときのまま窓ガラスがバリバリに割れている。仕方がないので一階にある侍女用の部屋のベッドに、メルと潜り込んだ。埃っぽいかと思ったが、意外にも部屋もベッドも綺麗だった。

身体はへとへとなのに、頭の中は落ち着かなくて寝つけなかった。早々に眠ったメルの頭を指で撫でながらグウェンの時計をどうしようと考えていたら、そのうち寝てしまったらしい。

眠い目を擦(こす)りながら慌てて着替え、広場に集合すると、マスルールが待っていた。彼も目の下に濃いくまができている。

ライラとライルは鐘の傍に立っていて、俺と目が合うと深々とお辞儀をした。二人が寄り添っているところを見ると、本当にもう大丈夫みたいで安心した。

「本日は第三の試験を地上の宮殿で行います。着替えがある方はそちらでお願いします。部屋を準備していますので」

マスルールの説明の後、俺達は全員揃って地上行きのエレベーターへ向かった。

「昨日、陛下が貴方の鈴宮に押しかけたと聞きました」

道中、マスルールが俺に話しかけてきた。ルシアから話を聞いたんだろう。侍女のサラがちゃん

と広場にいたから、昨夜ルシアは無事にマスルールと会えたようだ。
「鈴を鳴らしたんですけど、聞こえてました？」
「昨夜は部屋に戻らなかったので、鈴を持っていませんでした。申し訳ありません」
「まあ、ルシアが助けてくれたんで、結果としては大丈夫でした」
首は絞められたけどな。と、ちょっと非難する気持ちでマスルールを見ると、彼は俺の首元に視線を移す。
「怪我は大丈夫ですか」
「はい、なんとか。痕は残りましたけど」
俺はスカーフのように首に巻いているターバンの布を少しだけずらして、痕を見せた。首を絞められたときの指の痕は、まだ残っている。それを隠すために今日は首に布を巻いているのだ。
ちなみに、メルは俺の首に寄り添うようにして上手く中に隠れている。昨夜メルが生まれたことが皇帝にはバレてしまったから、取り上げられないように用心しないといけない。
昨夜のことを回想していると、マスルールが「申し訳ありません」ともう一度謝ってきた。
「それにしても、陛下は何が目的であなたの鈴宮に？」
「俺にもよくわからないんですけど、鍵がどうとか言ってましたよ」
「鍵？」
その単語を出した途端、マスルールの目が鋭くなった。
「鍵を捜していると言ったのですか？」

「いや、俺に鍵をよこせって、そう言ってたかな。何か勘違いしてるみたいだったけど」
そういえばアシュラフ皇帝の行動は意味不明だったんだよな。扉の鍵ってなんのことだったんだろう。
「そうですか。わかりました」
何かを察したような雰囲気のマスルールに、ちゃんと説明しろと食い下がりたかったが、エレベーターが地上に着いて会話が途切れてしまった。
「第三の試験では、候補者が皇帝と聴衆に一芸を披露します。まだ少し時間がありますので、着替えや準備があれば、各々の部屋でお願いします。朝食も用意してあります」
淡々と説明するマスルールに促されて、俺達は広間の近くに準備された部屋に通された。ロレンナ、リリアン、ルシアはそれぞれの侍女と一緒に部屋に入っていき、ライラとライルは二人で一つの部屋を使うようだ。
皆に続いて俺も自分に宛てがわれた部屋に入ろうとしたら、マスルールに呼び止められた。さっきの話の続きかな、と立ち止まったが、彼は微妙な顔をしている。
「実は、貴方の衣装は陛下から指示があります。中に用意してあるので、申し訳ないのですがそちらを着てください」
「……？　はい？」
「後で手伝いの者を行かせます」
そう言い残して足早に去っていったマスルールを、俺は不思議な顔で見送る。申し訳ないのです

が、と言った彼の言葉の真の意味は、部屋に入ってから判明した。
「なんで女装なんだ!?」
「お綺麗ですよ、レイ様！」
こざっぱりとした緑色の使用人服を着た少年が、手を叩いて褒めてくる。
さっき俺が部屋に入ってから、すぐに一人の少年が訪ねてきた。ノアと名乗った彼は宮殿に勤める侍従らしい。茶色や砂色の髪が多いラムルでは珍しく、黒に近い髪色と目の色をしている。年齢は多分十代後半くらい。
手伝いに来た、とハキハキした声で言ったノアは俺に抵抗する隙を与えず、部屋にあった衣装を着させた。真っ白な生地で、上着が羽織りのような合わせになっている、裾が長い女性の衣装を――
……あの皇帝は、一体何を考えてるんだ!?
人の首を絞めておいて、次の日には女装させるってどういう情緒なんだよ。おかしいだろう、完全に。
下の服は丈が長いスカートだったので、俺は絶対に穿かないと断固拒否した。
ノアは説得してきたが、俺が頑として首を縦に振らないので、仕方なく別の形の衣装を持ってきた。丈が長い袴みたいなやつ。ぴったりしてないから足がすーすーするけど、スカートよりはましだったので渋々了承した。皇帝の命令に逆らうとノアが罰を受けると泣きつかれたら、それ以上突っぱねられない。袴だと思えばギリ許容できる――と自分に言い聞かせたけど、俺の黒歴史に

新たな一ページが追加されたことに違いないのだった。
ノアはどこからか金髪の長い付け毛を持ってきて、俺の頭にそれを編み込んだ。一つに纏めて高く結い上げ、ポニーテールのように髪形を整える。それから、白い瑪瑙の玉がついた重い耳飾りをつけられた。首に残る指の痕はどうすることもできないので、上着の下に首元まで隠れる白い薄手の肌着を着込む。
ちなみに着替えの間、メルはターバンで包んで鞄の中に入れている。
「レイ様は女性より身長があるので衣装が映えますね！　お化粧しなくてもこのままで十分美しいですし。凛々しくて素敵です！」
ノアが嬉しそうに手を叩いている。猫のように目を細め、懐っこい顔をした少年には好感が持てるが、内容が内容だけに喜べなかった。
「化粧なんてしない……」と呟き、俺は椅子に沈む。すっと足元に出されたサンダルも女性ものだ。けれど底は平らで、男女どちらでも使えそうなものだったので素直に履き替える。
「準備が終わったと伝えてきますね！　もう少々お待ちください」
ノアが元気よく部屋から出ていったのを見送り、俺は鞄の中からメルを取り出した。
「なんでこんな目に……。この服じゃターバン巻けないよな……。メル、どうする？」
手の上に乗せて聞くと、こてんと首を傾げたメルは羽織りの裾に入った。しかし布がつるつるしていて滑るらしく、すぐに飛び出てしまったので結局頭の上に乗せることにした。
「広間に行くときは鞄の中に入れるからね」

「ぴぃ」

仕方ないね、と言うようにメルが返事をする。まだ生まれてない設定だから、俺が卵を温める鞄をさげていても問題ない。

俺は鞄の中に入れていた簡易魔法陣の羊皮紙（ようひし）を三枚、服の隙間に忍ばせた。一昨日オズからもらったものだ。昨日は鞄の中に入れたままで使う機会はなかったが、今日はすぐに取り出せるようにしておこう。

ちなみに、三枚の魔法陣がどんなものかはちゃんと調べておいた。一枚目は攻撃魔法で、二枚目は筋力を増強する補助魔法、三枚目は転移魔法の魔法陣だ。転移魔法は少し変わっていて、決まった場所に転移するんじゃなく、視界にいる誰かと自分の位置を入れ替えることができる。

「そういえば、一芸を披露しろとか言われたな」

第三の試験はノープランだ。まったく意欲が湧かないし、やらないという選択肢はあるんだろうか。挨拶（あいさつ）だけして終わろうかな。誰も俺には期待してないだろうし。

そんなことを考えながら少しうとうとしていたが、ふと我に返った。

「そうだ、グウェンを捜そう」

朝早くに鐘が鳴ったから、あいつは俺を捜してるはずだ。昨日別れる間際、三回目の鐘が鳴ったら俺を捜してほしいと伝えてあった。

俺は椅子から立ち上がり、メルを鞄に入れて部屋の扉を開けた。廊下を進むと、貴族達が広間に向かっているようで、周囲は結構騒がしかった。明らかに候補者ですという衣装の俺は悪目立ちしていたのだろう、すれ違う人達がひそひそと話す声が聞こえてくる。

「あれが六女に選ばれた異国出身の一人でしょうか」

「え？　あれが？　髪は長いですが、男ですよね？」

「女装でしょう。そういう趣味なのでは？　さすが、あの陛下に選ばれるだけのことはある」

「女装で試験に臨むとは堂々としていますね。陛下にそんな趣味があったとは意外です」

おっさん達、聞こえてる……聞こえてるよ！

皇帝の趣味なんて知ったことじゃないが、俺はやらされてるだけで断じて趣味じゃない！　大声で叫ぼうとしたが、聞こえてきたおっさん達の次の言葉で口をつぐんだ。

「陛下が悪魔に憑かれてしまったなら典礼を開く意味などないのに、どうしてダーウード様は諦めようとなさらないのか」

「ご自身が手塩にかけて育てた孫ですからね。摂政を立てて、アルフ様に皇位を譲位してもらわなければ政（まつりごと）が滞（とどこお）るというのに」

孫、という単語に、俺は歩くスピードを緩めた。

あの宰相のお爺さん、アシュラフ皇帝の祖父だったのか。でもマスルールが、宰相はイラムを行き来できないと言ったから皇族ではない。なら、妃側の親族ということになるな。

新しい情報を一応頭の中に書き留めて歩を進めると、今度は壮年の男性が前から歩いてきた。黒い民族衣装を着た目つきの鋭い茶髪の男性は、俺を見ると明らかに嫌悪を顔に浮かべて、睨んでくる。

一方的な敵意を向けられて、俺は足を止めた。だが俺を一瞥した相手は立ち止まらず、足早にすれ違う。

「ジャアファル様、本日はわざわざ典礼にご出席なさるのですか？」

さっき噂話をしていたおっさん達が、その男性に声をかけるのが聞こえた。

「用事のついでだ。宰相に話がある」

「でしたら、ジャアファル様からもダーウード様に申し上げてください。早く陛下を退位させるようにと」

「そんなことはわかっている。私もそのつもりでいる」

「ならば安心です。ジャアファル様がアルフ様の摂政になってくだされば、ダーウード様の派閥も少しは大人しくなるでしょう。私達ももっとやりやすくなります」

おっさん達がジャアファルと呼ばれた男性の周りに集まって口々に言う。気づけば、通路にいた人は皆いなくなっていて、俺しかいなかった。だからなのか結構危ない話をしているようなんだが、それでいいのか。

それにしても、アシュラフ皇帝の退位を望む派閥があるということは、ラムルの内部も一枚岩ではないんだな。俺は背を向けて遠ざかる振りをして、話が聞こえるギリギリの距離を保つ。

「結界の維持が必要とはいえ、呪われた皇族は煩わしい。ジャアファル様、スイード様にもう一度お戻りいただくようお願いできないでしょうか。スイード様ならばもう呪いは発現しないでしょう。政に口を挟む方ではないから我々も安心なのですが」

「それができればとっくにそうしている。あの方はもう正気ではない。何を言い出すかわからない状態では、首をすげ替えても意味がないだろう」

「……せめて、マスルール様がダーウード派にくみしていなければ。あれだけの神聖力を持っていて呪いに侵されていない方は、かなり貴重ですが」

「彼は駄目だ。高潔すぎる。裏から操られるのをよしとしないだろう」

ジャアファルという男のため息が聞こえた。

「放っておいても、アシュラフ皇帝は遠からず退位せざるを得まい。そうすれば自然にアルフ殿下が即位なさるのだから、私達は坐して待てばよい」

「そうですな。その頃にはクレイドルとデルトフィアの関係も悪化しているでしょうから、ちょうどいいかと」

向こうの方へ去っていったおっさん達の声は、そこで聞こえなくなった。

なんか、めちゃくちゃきな臭い話してたな。

聞き間違いじゃなければ、デルトフィアとクレイドルの関係がどうとか言ってたけど。オズが、クレイドルの魔物騒動はデルトフィアの奸計だと広めようと企んでる奴らがいるって言ってたけど、犯人、今のおっさん達じゃないのか？

ジャアファルと呼ばれた尊大な態度の男の名前は覚えた。今聞いた話を後で宰相に伝えておこう。

そんなふうに考え事をしていたら道に迷ってしまった。グウェンにも会えないしどうしようと思っていたら、役人の男性が俺を見つけて小走りで駆け寄ってきた。

「お急ぎください。試験が始まります」
いつの間にかかなり時間が経っていたらしい。急かされて廊下を戻り、無事広間に辿り着いた。
昨日割れた窓ガラスは全部直っていて、美しい状態に戻っている。
玉座にはたくさんの花や果物が供えられた祭壇があり、アシュラフ皇帝がクッションにもたれて欠伸をしていた。その前には一段高く舞台が作られ、一面に紺色の絨毯が敷かれている。ルシア達は、舞台の横にある金色の絨毯に横一列で座っていた。
俺は完全に遅刻してきた人間だった。悪目立ちしたくないのに早々にやらかしてしまった。
そそくさとルシア達の方へ向かうと、広間の後方に貴族らしき年配の男女が座っていることに気づいた。こんな服を着ているからか、彼らの視線を集めて気まずい。
ルシアの隣に滑り込んだ瞬間、玉座から視線を感じた。顔を上げると、皇帝が俺を見てぽかんとしている。初めて見る間の抜けた顔だ。
「……なんだ？」
人を上から下まで確認するような視線の動きを見て、俺は眉を顰めた。
なんだよ、その反応。まるで幽霊でも見たかのような表情だな。昨日俺の首を絞めたから、死んだはずだとでも思っていたのか。俺は忘れてないからな。昨日のことを許すつもりはない。
皇帝はまだじっと見てくるが、あえて無視した。
俺達の前にも、果物が山積みになった平たい皿と飲み物が置かれている。よく見ると、玉座にも同じように皿と盃があった。試験というより宴席に近いのか。

「レイナルド様、いつの間にそんな衣装に？」
ルシアが目をパチパチさせながら囁いてきた。いつもの民族衣装を着ている彼女が羨ましくて、俺はじっと見つめ返す。
「よくわからないんだけど、皇帝命令で着せられたんだよね……」
「アシュラフ陛下、レイナルド様のことガン見してますもんね。どうしたんでしょう」
「俺が知りたいよ」
嘆息して、ちらりと皇帝を見る。奴はもうつまらなそうな顔に戻っていて、クッションに身体を沈めていた。
「ただ今より、第三の試験を始める」
宰相の声が広間に響き、俺は周りを見回した。
「マスルールさんは？」
朝、話をした彼の姿がない。ルシアに聞くと、小声で耳打ちしてくる。
「砂漠の方で問題が発生したみたいです。魔物の目撃情報があって、マスルールさんが様子を見に行きました」
なんと、また厄介そうな案件対応に追われているらしい。彼の立場は皇帝の側近じゃないのか？便利屋さんみたいになってるけど、一応皇族なのにちょっと可哀想じゃない？
本人の意思とは関係なく苦労を引き寄せる体質なんだな、と俺はちょっとシンパシーを感じた。
試験が始まり、最初に舞台に進み出たのはロレンナだった。

紺色の衣装を着た彼女は、舞台の中心に立って両手から抱えるほどの水の球を出して見せた。床に置いた籠から白い花びらと草の葉を浮かび上がらせ、球体の周りを回転させながら混ぜていく。巨大なハーバリウムのようになった水の球に、ロレンナは指先を向けて光の粒を放った。キラキラと光り輝く水球は最後に一瞬で凍りつき、曇りのない、しんと透き通った氷の塊になる。

ロレンナが上品なお辞儀をして、そこで彼女の披露は終わった。流れるようなロレンナの魔法に見入っていた人々が、一斉に拍手を送る。

コントロールも創造性も素晴らしくて、俺も思わず感心した。水や風の魔法を詠唱もなく操っているのもすごい。

ロレンナは氷の塊を舞台の隅に残したまま戻ってきた。舞台の飾りとして置いておく、ということみたいだ。

次に、リリアンが呼ばれて舞台に立った。髪を後ろで一つに纏め、丈の短い民族衣装の下に足首がすぼまったズボンを穿いている。珍しい格好だなと思っていたら、リリアンが披露したのはなんと軽業（かるわざ）だった。

おっとりした雰囲気にもかかわらず、彼女は運動神経が抜群だった。さすが武芸の国クレイドルのお姫様。宙返りしたり連続でバク転したりと、普通の女性にできないことを軽々とやってのける。

ルシアも知らなかったのか、驚いた顔で見ていた。

「リリアンがあんなに身軽だったなんて知らなかったな」

「そうですね、ゲームでも運動神経はよかったと思いますけど、深窓のお姫様ってイメージだったのでびっくりです」

「ほんとだよね。そういえば、昨日の試験のときも動体視力よかったもんな」

毒の入った茶のカップを当てるという試験をしたとき、リリアンは皇帝の手の動きをほぼ正確に捕捉していたっけ。

演舞を終えて優雅にお辞儀をしたリリアンに拍手を送りながら、俺は心の中で思った。

二人とも、真面目すぎやしないか。俺はノープランなんだけど。

ちょっと遠い目になっていると、次に呼ばれたのはライラだった。

今日の試験ではルシアを最後にしてほしいと、マスルールに頼んでいた。この場にはいないけれど、ちゃんと俺達の希望を汲んでくれたらしい。

ライラはライルと共に舞台に上がり、ダーウード宰相と何か話していた。どうやら一芸は二人でやるようだ。ライルは琵琶（びわ）を持っている。

後方が少しざわついたが、ライルが琵琶を弾き始め、ライラが舞台の上を滑るように舞うと、戸惑いの声はすぐに静まった。

歌が終わり、二人がお辞儀をした瞬間、聴衆から大きな拍手が送られる。

「それでは、次にレイ殿」

つい自分のことを忘れて見入っていた俺は、宰相に名前を呼ばれて思い出した。そういやノープランだったな、と。

メルが入った鞄をルシアに預かってもらい、舞台へ歩きながら考える。俺は今、首輪のせいで魔

法が使えない。正直、俺から魔法を取ったらこれといって何もない。リリアンのような軽業はできないし、双子みたいに歌を歌ったり踊ったりなんてもっての外だ。楽器はできないこともないが、人に披露できるレベルじゃないし。

名前だけ名乗って終わりにしてもいいかな。俺は女装したってだけで十分醜態を晒してるんだから、それで勘弁してもらえないか。この試験に評価点があるのか知らないけど、全然ゼロ点でいいから。

ちらりと宰相を見ると、何をするのかと興味深げな顔で俺を見てくる。

前の四人が真面目にやりすぎだ。何もありませんなんて言える空気じゃない。どうするんだよこれ、俺は何したらいいんだ。バカ真面目な顔でラジオ体操でも披露したらいいのか？　ルシアにしかウケないぞ、そんなの。

衣装の風通しがよくないからか、空調が完璧だったイラムから下りてきたせいなのか、地上はかなり暑い。暑くてまともに考えられないんだよな、と思ったそのとき、さっきロレンナが作った氷の球が目に留まった。溶け始めているが、まだ球体の形を保っている。

それを見て閃いた俺は後ろを振り返り、ロレンナに聞く。

「ロレンナさん、あの氷ってもういらないですか？」

「え？　はい」

「じゃあ使わせてもらっても？」

「ええ、どうぞ」

珍しく戸惑った表情をしたロレンナに、俺はもう一つ尋ねる。

「ちなみに、あの草と花って食べられますか？」

「はい。あれは私が育てているハーブなので、食べても害はありませんが……」

それを聞いた俺はロレンナにお礼を言い、舞台に上がっておざなりに一礼すると、服の中から簡易魔法陣を一枚取り出した。思いつきだけど、とりあえずやってみよう。

魔法陣を破り、右腕にそれを貼りつけた。三枚のうちの一つ、筋力を増強する魔法だ。

初めて使ってみたが、腕の感覚はいつもと変わらない。少し筋が張るような感じがする程度か。

俺は氷の球に近づいて、右手でそれをわしっと掴んだ。少し力を入れると、硬いはずの氷がビシリと割れて、豆腐のようにぼろりと崩れる。

「おお、予想以上！」

思わず感嘆の声を漏らした。

視界の端で宰相が、え？　という顔をしていたが、俺は気にせず氷の塊を掴んで崩し続ける。握力がゴリラ並になっているようで、面白いように氷が砕けていく。魔法の効果を確認した俺は、玉座の前まで行き、果物ごと銀色の平たい皿を持ち上げた。皇帝が怪訝な顔をしているが、無視してもう一度氷の塊の前に戻る。

果物を床に落としてから皿を持ち直し、その上で氷の塊を握り潰した。粉々にはならなかったが、ある程度小さくなったのでよしとする。氷の中から出てきた花とハーブが、いい感じにアクセントになった。光の粒は空気に触れると消えるけど、氷の中に残ったものはお洒落な感じで映えだな。

山盛りになるまで砕いたところでやめにする。
ただちょっと味気ないかなと思い、果物の中からリンゴを拾った。皿の上で握った瞬間、ぐしゃりと潰れる。
「え……すごぉ」
これ、憧れだったんだよな。リンゴを片手で握り潰すって。
ちょっとやりすぎかな、と思いながらも、楽しくてあと三個くらい潰した。
後方の聴衆席がざわついている。ちらっと視線を向けると、前に座っているおばさんが目を見開いて手を口に当てていた。気持ちはわかる。伝統ある六女典礼の中に女装した異国の男が紛れ込んでて、リンゴ握り潰してるんだもんな。
俺は玉座に戻って皇帝の足元に皿を置いた。皇帝に一芸を披露するという建前上、完成したものを玉座に供えればいいだろう。我ながらよくできたな。
広間に沈黙が流れる中、皇帝が俺の置いた皿を見て眉を顰めた。
「何だそれは」
「かき氷」
即答すると、皇帝は無言で皿の上に盛られた氷の残骸を見つめる。
どう見てもかき氷だろう。少し粒は大きいが、リンゴの味もしてきっと美味しい。衛生的にどうなのという点を除けば、暑い今日食べるにはちょうどいいんじゃないか。いらないなら候補者席に持って帰ろうかな。涼が取れそう。

呆気に取られているダーウード宰相が、聴衆に拍手を促すのも忘れてこちらを見ている。
しばらく氷の山を見下ろしていたアシュラフ皇帝は、ついと俺に視線を向けた。
「食べさせろ」
「は？」
今度は俺がぽかんとしてしまった。皇帝は氷の載った銀色の皿を指差して続ける。
「手が汚れる。お前が食べさせろ」
「……え？　食べる？」
食べるのか？　これを？
正直本当に食べると言うなんて思っていなかったから戸惑った。
「早くしろ」
そう言われても動けずにいたら、昨日のように風が吹いて背中を押された。予期せず躓いて皿に突っぷしそうになる。
「危なっ、食べさせろったって……」
周りを見回したが、氷を掬えるようなものはない。わざわざ持ってきてもらうのも面倒だし、そもそもなんでこいつの命令を聞かなきゃいけないんだ。
俺は左手で皿を持ち、わしっとかき氷を掴むと皇帝の顔の前に持っていった。
そんなに食べたかったらこのまま食べろよ。食べれるもんならな。そんな気持ちでアシュラフ皇帝を見下ろすと、奴は無言で俺の手の上にある氷を見て、突然右手首を掴んできた。

「えっ」
マジで食べるの？
「ふざけるな」とキレるかと思ったのに、皇帝は俺の手首を掴んで引き寄せ、本当に手のひらの氷を食べた。
口に入れてすぐに眉根を寄せた皇帝は、手首を掴んだまま俺を見上げる。
「まずい」
それを聞いて呆然とする俺の顔を見た皇帝は、にやりと笑った。
「不死鳥の方が美味いだろうな」
反射的に持っていた皿を皇帝にぶん投げた。
後方から悲鳴が上がったが、皇帝は皿がぶつかる前に手で弾いた。かき氷は玉座の下に落ち、床に飛んだ皿が大きな音を立てる。
「次はないと言ったのに、よくやる」
俺の手首を掴んだまま皇帝がぎろりと睨んでくるが、俺は平然と鼻を鳴らした。
「こっちは昨日あんたに首絞められてんだよ。仲良くお話しなんかするわけねーだろ」
メルが生まれているとバレた以上、本気で奪いに来られたら厄介だ。怒りでもいいから興味の矛先を俺に向けておいた方がいい。
喧嘩なら買う、と睨み返すと、俺をしばらく見上げていた皇帝は俺の頭からつま先まで視線を動かした後、急に興味を失ったように手首を離した。

「興が削がれる。その衣を着せたのは間違いだったな」
つまらなそうに呟いて俺から視線を外し、皇帝はぞんざいに手を振った。
「もういい。戻れ」
……はあ？
突然スイッチを切った相手を見下ろして、俺は心の中で盛大にツッコミを入れた。
なんなんだよ、キレたり沈んだり。こいつの情緒、マジでおかしいんじゃないか？
薄ら寒い意味不明さを感じながら、俺は皿の上で手を払ってから皇帝にくるりと背を向けた。
さっさと候補者席に戻ろう。この後ルシアの出番だから、そこでこの皇帝の正体が判明するはずだ。
自分の席に戻る途中、ダーウード宰相と目が合った。呆気に取られながらも宰相が両手を持ち上げているのを見て、俺は高速で首を横に振った。この雰囲気で拍手なんかされたら、それこそおかしな空気になる。もう俺のことは忘れてくれ。
そう念じたら宰相が手を下ろしたので胸を撫で下ろし、やれやれと視線を逸らした……先の窓の外に、無表情のグウェンが立っていてぎょっとした。
「は!?」
ダーウード宰相の後ろにある大きな窓の向こうに、グウェンと、何故かアルフ殿下が一緒にいた。二人とも窓枠に身を寄せて姿を隠しているようだが、半分くらい身体が出てるから見えてしまっている。でも、グウェンは砂色のラムルの軍服を着ているからか背景と馴染んでいた。
その時、グウェンとバッチリ目が合った。

立ち読みサンプルはここまで